兄の声

小川未明

青空文庫

おかあさんは、ぼくに向かって、よくこういわれました。

「小さいときから、おまえのほうは、気が強かったけれど、にいさんはおとなしかった。まだおまえが、やっとあるける時分のこと、ものさしで、にいさんの頭をたたいたので、わたしがしかると、いいよ、武ちゃんは、小さいのだものといって、にいさんは、おこりはしなかった。ほんとうに、がまん強い子でした。」

ぼくは、そうきくと、物心のつかない幼時のことだけれど、なんとなく、いじらしい兄のすがたが目に浮かんで、悲しくなるのです。

兄が召集されてから、後のことでした。

えんがわに、兄のはいていたくつがかわかしてありました。まだ落とし残されたどろがついています。朝晩、兄は、このくつをはいて、通勤もすれば、また会社の用事で、方々をあるきまわったのでした。ときどきは、映画館の前にも立てば、喫茶店へも立ちよったでありましょう。なにしろ、かけがえのくつを持たなかったから、かかとはへるにまかせて、いたんでいました。もっとも、一度、街頭で朝鮮人のくつなおしに裏皮をとりかえさせて、月給のほとんど全部を払わせられたことがあります。考えれば、このくつには、兄のふんできた生活の汗がにじんでいるのでした。形がいびつとなって、ところどころ穴があいているのも、心なしにながめることは、できません。

兄のところへ、友だちが、たずねてくると、しぜんと生活の感想や、世間の様相が話にのぼりました。兄のこれらの意見も、このくつをはいて、あるくうちに得られた体験でありましょう。

兄は、こういうのでした。

正直で、しんせつで、謙遜な人というものは、たとえ、はじめてあった人でも、もうこれまでにいくたびもあったことがあるような、なつかしさをおぼえるものだ。

「あなたとはいつかどこかでお目にかかったことがありますね。」と、ききたくなることがある。そんなときは、しいて自制しながら、

「なんで、そんなことがあるものか。きちがいでないかぎり、だしぬけに聞かれるものではない。」と、自分をしかるのだ。

また、こんなおかしなことを空想することもある。

「もしかすると、前世において、出あった人かもしれないぞ。」と。

「いや、まったく、ばかげきった話ですが、世の中に善良な人間ほど、相手を感激させるものは、ありません。」と、兄は、いうのでした。すると、兄の友だちは、

「そうですか。そういういい人と、どこで、おあいなされましたか。」と、かならず問うのであります。

兄は、友だちに、

「わたしは、社用で、方々の会社や、工場を訪問します。そして、いく人となく情味のゆたかな人たちと出あいました。ところがふしぎに、それが門番とか、受付とか、地位の低い人々にかぎっていました。さもなければ、大衆食堂の前へならぶような人々であります。それらの人たちとは、顔を見たさいしょから、なんでも心のうちを、うちあける気持ちになれば、また一本のたばこを分けあったこともめずらしくありません。なにがそうさせるのか、とにかく、この苦痛の多い世の中で、こうした人々の存在は、どんなになぐさめとなることでしょう。わたしは、会社の内にいるときより、外を出あるくときのほうが愉快なのも、そのためです。」と、語るのでした。

「じゃ、社内の空気が、おもしろくないのですか。」と、友だちは、きくのであります。

「考えてごらんなさい。命令と服従しかないところに、いったい、なごやかさなどというものがありましょうか。」と、兄は、答えました。

兄は、おだやかな性質であったけれど、だれに対しても、正直に思ったことを話しました。ことに友人に対しては、すこしもかくしだてすることはなかったのです。兄は、会社で、上のものが権力によって、下のものをおさえつけようとするのを見て、なにより不愉快に思ったらしいのでした。

「課長は、いつも、こわばった顔をしているが、家へかえって、細君や、子どもたちにも、あんな目つきで、ものをいうのだろうか。」と、さもまじめに、考えていたこともあります。

また同僚が、むやみと上役に対して、機嫌をうかがうのを軽蔑しながら、「公用と私用を一つにするばかもないものだ。自分からこのんで、奴隷になろうとしている。」と、歎息していたこともありました。

よく重役が、買い出しや、家事の雑役などに、社員を使用することがありますが、兄は、けっしていかなかったばかりでなく、そんなひまがあるときは、映画を見たり、レコードをきいたりしたものでした。

あるとき、ぼくが、

「にいさんは、いつも音楽をきいたあとで、どんな空想をなさいますか。」と、きいたことがある。ふだんから、美と平和を愛する兄であるのを知っていたけれど、こうした場合に、希望や、空想が、どんな形であらわされるだろうかと思ったからです。

兄は、遠くを見るような目つきをして、

「そうだな、いい音楽をきいたときだね。」といって、考えました。

「美しい、絵のようなけしきが、目に浮かんでくるよ。」

「どんなけしき？　現実でなく、架空な、未来の世界とでもいうのですか。」

「いや、そんな空虚な夢ではない。たとえば、赤い夕空の下に、工場の煙突がたくさんたっている、近代的な街の風景とか、だいだい色の太陽が燃える丘に、光線の波うつ果樹園とか、さもなければ、はてしない紺碧の海をいく、日章旗のひるがえる商船とか、そんなような、

清らかで、朗らかなうちにもさびしい、けしきが目に浮かぶのだよ。」と兄は、いったのでした。ぼくは、

「にいさん、そうした美しさなら、いくらもあるけしきじゃありませんか。」と、いったのです。

兄は、じっとぼくを見て、

「ただわたしがそういっただけでは、わからないだろう。なるほど外観からいえば、この種の街や、工場や、農園は、絵として見ても、手近なものであるにちがいない。問題は、その町や、村で働いている人たちのことだ。わたしが、これまであった、あのような、謙虚で、正直で、しんせつな人々が働いているということでなければならぬ。かりにそうしたどうしの集まりだと想像してごらん。日々そこでいとなまれる生活こそ、どんなにか、楽しかろうじゃないか。そこには、暴力や、権力をもつ人間もなく、すべてが理解と同情とで、協力しあうのだからね。」といいました。

そうきくと、たとえ、経験のとぼしいぼくでも、そして、また深いことはわからぬけれど、そうした社会が平和で、真に住みよいところであるということだけは、さとれるのでした。

兄がいなくなってから、家の中は、急にさびしくなりました。そして、はやいく日か、たったころ、母はひとりごとのように、

「ゆうべ、あの子が特攻隊へはいった夢をみたが。」といって、ふさいでおられました。

だから、ぼくは、

「にいさんにかぎって、特攻隊などへ、入りませんよ。」と、うち消して、無理にも母を元気づけようとしました。しかし、母は、いつまでも気にかかるとみえて、それから後も、家の中は、なんとなく、うすぐらいような日がつづきました。

ところが、まったく突然でした。それが、おどろきでもあり、喜びでもあったのは、兄が帰ってきたことです。

ある日、だれか玄関へきたようなけはいがしたので、姉が出てみると、立っていたのが兵隊すがたの兄だったので、姉は、びっくりして、

「まあ、義ちゃんなの？　お母さん、義ちゃんが帰ってきましたよ……。」と、さけんだ。その声をきいて、母も、ぼくも、ころげるようにとびだしました。兄は、泣いているのです。

「さあ、早くお上がり、どうしたの。」といって、母も泣きました。

「にいさん、なにか変わったことがあったの？」

ぼくは、いままで兄の泣いたのを見たことがなかったのと、もし出征すれば、おそらくふたたび見られないだろうと思っていたので、ついこうききました。姉も、

「義ちゃん、どうかしたの？」といって、兄の顔をのぞくようにしました。

兄は、あとから、あとから、目にあふれ出る涙を、手の甲でふきながら、頭を左右にふって、

「みんなの顔が見られて、うれしいのだ。」と、わずかに答えたのです。

「こっちへ、あがってから、ゆっくりお話しなさい。」と、母は、手を引かんばかりにして、兄がくつのひもをとくのも、もどかしげに見守っていました。

「にいさん、もういかなくてもいいの。」

「いまなん時だね。晩方までに、こちらを出て、隊へかえらなければならない。」

兄は、あいさつが終わると、これまで、自分が勉強をしたり、レコードをかけたりした、へやへいきました。家のものは、その後も、兄がいるときと同じように、そうじはするけれど、だれも、手をつけようとしなかったので、本箱のなかも、たなのかざりも、兄が出ていったときのままとなっていて、すこしも変わっていなかったのです。

兄は、さもなつかしそうに、あたりを、見まわしていました。それから、いつもそうしたように、好きなレコードをかけました。

外国物では、アベ＝マリアとか、粗朴ながら、血のつながりに、哀愁をもよおす日本の俚謡などを兄は、このみました。

「義ちゃんが、ずっとこうして、家にいてくれたらいいのにね。」と、姉はそばに立ち、鼻をつまらせていました。

「じきにかえってきますよ。そうしたら、もうどこへもいきません。」と、兄は、答えました。

「お母さんが、心配していらっしゃるから、きっと無事に帰ってね。」

晩方近く、小雨の降るなかを、兄は、隊へとかえりました。みんなが、門口まで見送りに出ると、ふりかえって挙手の礼を残して去りました。

「あんまり思いがけなかったので幽霊かと思ったわ。」と、姉はへやへもどると、母に話していました。

「公用のついでとかいいますが、よく寄ってくれましたね。」と、母は、目をしばたたいていました。

しかし、それきり、兄は家へ帰らなかったのです。やはり特攻隊に入っていたのでした。あとで、このことも知ったのですが、兄はあのとき、いとまごいのつもりできて、わたしたちに気づかれぬように、アルバムから、父と母の写真をはいで持っていきました。

戦争中、特攻隊が、よく出発前、別れのことばを放送して故国にのこしたことがありますが、地域の関係からか、兄はこれに加わらなかったのです。しかしながら、ぼくは、現在でも、道をあるいているときとか、またぼんやり空想にふけっているときとか、そんなようなときに、どこからともなく、兄の声をきくことがあります。

ことにさんらんとして夕焼けのする晩方などに、あざやかといってもいいくらい、はっきりと、なつかしい兄の声をきくことがあります。

「おまえは、真に自由と、正義と、平和のために、生命のかぎりをつくせ！」と。

それは、短い生涯であったけれど、美と平和をこのうえなく愛した兄として、こういって、

ぼくをはげましてくれるのは、まことに、当然のことと思われるのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　13」講談社
　1977（昭和52）年11月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「赤い雲のかなた」小峰書店
　1949（昭和24）年1月
初出：「子供の広場」
　1946（昭和21）年4月
※表題は底本では、「兄《あに》の声《こえ》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2018年5月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

兄の声

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/